

『120分 de 法華経！』 vol.5 Jul.2024

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 序品 第一』 (迹門・序分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜

せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習学せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくと

とを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)



<序品のあらすじ>

【靈鷲山の釈尊のもとへ八万人の菩薩、バラモン教や古代の神々らが集う】——

【三七頁 一行】『是(かく)の如きを我聞(われき)きき』 私はこのように聞いております。

釈尊が王舎城(おうしゃじょう)の靈鷲山(りょうじゅうせん)にいらっしゃった時のことです。釈尊のまわりには教えを聞くために1万2千人に及ぶ大勢の出家修行者たちが集まっていました。／『諸漏(しよろ)已(すで)に盡(つ)くして復(また)煩惱(ぼんのう)なく、己利(にり)を速得(たいとく)し諸(もろもろ)の有結(うけつ)を盡(つ)くして、心自在を得たり』 この人たちはみな、迷いを除き尽した尊い境地に達している人たちです。煩惱を断ち切っており、自行を尽した結果、人格の完成を果たしています。そして様々な現象にとらわれる心がなく、物事から超越しており、自由自在な心境を得ています。

【代表的な声聞、そして、釈尊の母・妻らも連なる】——

【三七頁 三行】その人たちの名前をあげると、憍陳如(きょうちんによ)、摩訶迦葉(まかかしょう)、舍利弗(しゃりほつ)、目犍連(もっけんれん・目連もくれん)、富楼那(ふるな)、阿難(あなん)、羅睺羅(らごら)

などの大阿羅漢(だい あらかん)たちです。

【三七頁 終四行】また、すでに学び尽して、もはや学ぶことがない人や、まだ学びの最中にあるお弟子たちが2千人もいます。そしてその中には、釈尊の養母である摩訶波闍波提比丘尼(まかはじゃはだい びくに)が6千人の同信者を引き連れており、羅睺羅(らごら)の母親である耶輸陀羅比丘尼(やしゅたら びくに)も、同信者たちを引き連れて列座しています。

【代表的な菩薩とその徳分を紹介、讃歎】——

【三七頁 終二行】『菩薩摩訶薩(ぼさつ まかさつ)の八萬人あり』そして八万人にも達する菩薩たちも、座に連なっています。この菩薩たちはみな最高無上の悟り目指す志を持ち、もはや善が悪に負けるような心身ではなく、人を正しく導く強い指導力(樂説弁才・ぎょうせつべんざい)を具えています。／『不退轉(ふたいてん)の法輪を轉(てん)じ』まるで車輪が回転し続けてどこまでも進んで行くように、仏の教えをあまねく説き弘めて行く努力を続けます。そして、自分の精進が後戻りするようなことなど決してありません。

【三八頁 一行】『諸佛(しょぶつ)の所(みもと)に於て衆(もろもろ)の徳本を植え』これらの菩薩たちは、これまでに数えきれないほど多くの仏を供養し、仏の悟りを得るための様々な善行を積み重ねています。／『常に諸佛に稱歎(しょうたん)せらるることを爲(え)』ですから、仏から常に褒(ほ)め讃(たた)えられている菩薩たちです。この菩薩たちは、／『慈を以て身を修め、善(よ)く佛慧(ぶつて)に入り、大智を通達(つうだつ)し、彼岸に到り。～能(よ)く無數(むしゅ)百千の衆生を度(ど)す』まず人の幸せを願う「慈」の心を基本としており、全てのものの差別相(智)と平等相(慧)を見通す力を具えています。すでに迷いの世界を離れ、悟りの境地に達しています。ですからその素晴らしさと名声は、世界中にあまねく知れ渡り、無数の衆生を救っている菩薩たちです。名前をあげますと、文殊(もんじゆ)菩薩、觀世音菩薩、藥王菩薩、勇施(ゆうぜ)菩薩、弥勒(みろく)菩薩など、数多くの菩薩たちが列座しています。

【バラモン教の神々やインド古来の鬼神、その他、国王・臣民たちが集う】——

【三八頁 七行】また、バラモン教の神々もいます。釈提桓因(しゃくだいかんにん・帝釈天たいしゃくてん)のこともや天上界の神々、四天王や娑婆世界を司る梵天(ぼんてん)の神々がいます。それらの神は、それぞれが何万人という多くの家来たちを引き連れています。また、自然界の中に住む鬼神たちもいます。そのほか、この靈鷲山があるマガダ国の王である阿闍世(あじゃせ)王(韋提希夫人・いたいけ ぶにんの子)も、多くの家来を従えてやってきて、皆、釈尊のみ足に額を付けて礼拝し、一步退いてその場に座しています。

これらの者たちは世尊を囲んで感謝の供養を捧げると、世尊は多くの菩薩たちに向けて、世を救い、人を救う教え、すなわち『無量義・教菩薩法・仏所護念』の教えを説かれたのでした。

【『無量義経』を説き終えた釈尊が、『無量義処三昧・むりょうぎしょざんまい』に入る】——

【三九頁 終三行】世尊はこの『無量義』の教えを説き終えると、／『結跏趺坐(けっかふざ)し無量

義處(むりょうぎしょ) 三昧に入(い)って身心(しんじん) 動じたまわず』諸法実相に全精神を集中する『無量義處三昧(むりょうぎしょ ざんまい)』という三昧に静かに入られました。

【**奇瑞(きざい(瑞相・ずいそう))が現われる。 ☆ <<此土の六瑞(しどのろくずい)>>】**——

【三九頁 終行】『佛の上(みうえ) 及び諸(もろもろ)の大衆(だいしゅ)に散じ普佛世界(ふぶつせかい) 六種(ろくしゅ)に震動(しんどう)す。～ 一心に佛を觀(み) たてまつる』すると天空から美しい花々が世尊のお体へ、そして、その座にいるすべての人たちにも等しく降りかかり、大地も感動して震え動きました。そのため、説法会にいるあらゆる人たち、修行者、バラモン教の神々、鬼神や国王、その家来たち、さらには動物をはじめ生きとし生けるものすべてが、かつてない深い感動を覚え、合掌して仏さまの尊いお顔を仰ぎ見るのでした。

【四〇頁 四行】『爾(その)時に佛眉間(みけん) 白毫相(びやくごうそう)の光を放つて』その時です。世尊の眉間(みけん)から鮮やかな光がパッと放たれたのでした。

※<<此土の六瑞>>とは：①『無量義經』が説かれる。②『無量義處三昧』に入る。③摩訶曼殊沙華が天空から降り注ぐ。④普仏世界六種震動。⑤大衆が未曾有の歡喜。⑥『仏眉間(ほとけ みけん) 白毫相(びやくごうそう)』の光を放つ。

【**奇瑞(きざい(瑞相・ずいそう)) ☆ <<他土の六瑞(たどのろくずい)>>が現われる。】**——

【四〇頁 四行】『東方萬八千の世界を照らしたもうに周徧(しゅへん) せざることなし。下(しも) 阿鼻地獄(あびじごく)に至り、上(かみ) 阿迦尼吒天(あかにたてん)に至る』その光は遙か東方の一万八千の国々、つまり、未来のすべての世界に及び、下は無間地獄(阿鼻地獄・あびじごく)、上は有頂天(阿迦尼吒天・あかにたてん)に至るまで、隅々に行きわたり、一斉に明るく照らし出されました。つまり、仏さまの智慧の光(眉間白毫相・みけんびやくごうそう/の光)によって、その人にとっての最低の状態(地獄)から最高の幸せの状態(有頂天)までを、つまびらかに明かされ

たのでした。そのため／『彼(か)の土(ど)の六趣(ろくしゅ)の衆生を見(み)』六道を輪廻して迷う凡夫の姿や、それらの人々を救う仏の姿、修行者たちや菩薩たちの姿、そして仏が涅槃に入り、仏滅後、仏を讚嘆し供養する人々の姿などが見えるのでした。

※<<他土の六瑞>>とは：他土(東方萬八千世界・未来の世界)の ①六道輪廻する衆生が見えた。②諸仏の姿が見えた。③諸仏の説法の声が聞こえた。④出家・在家修行者の修行の結果を見ることができた。⑤菩薩が菩薩道を行ずる姿が見えた。⑥諸仏が涅槃に入り、人々が塔を建て、仏を供養する姿が見えた。

※ 東方の世界とは、「未来の世界」(参照：P170・2行/P125・終4行)

【**これらの奇瑞(きざい(瑞相・ずいそう))を見た弥勒菩薩の疑問】**——

【四〇頁 終三行】その有り様を見て、弥勒菩薩は考えました。

「世尊は今、不可思議な力をお示しになって、このような光景を現わされた。／『今者(いま) 世尊、神變(じんべん)の相を現じたもう。何の因縁を以て此(こ)の瑞(ずい)ある。今佛世尊は三昧に入(い)りたまえり。是(こ)の不可思議に希有(けう)の事を現ぜるを、當(まさ)に

以て誰にか問うべき』 これは一体どのような意味があるのだろうか？ 世尊にお伺いをしたいが、世尊は三昧に入っておられ、お尋ねすることができない……。一体、誰に聞けば、このことを正しく答えてくれるだろうか……？」

【四一頁 二行】 『文殊師利(もんじゅしり)法王の子(みこ)は、已(すで)に曾(かつ)て過去無量の諸佛に親近(しんこん)し供養せり 必ず此(こ)の希有(けう)の相を見るべし。我今(われいま)當(まさ)に問うべし』 「そうだ。世尊のお心をよく知り、過去世において数えきれないほどの諸仏にお仕えたことのある文殊菩薩ならば、きっとこの不可思議な光景を見たことがあるに違いない。よし、文殊菩薩に聞いてみよう」。弥勒菩薩はそう考えついたのでした。

【四一頁 三行】 その時、出家・在家の修行者をはじめ、天人・竜神など、その座に連なる全ての者たちも弥勒菩薩と同じ疑問を持ち、この不可思議な現象の真相を、誰に聞けばよいのかと考えていました。

すると弥勒菩薩は、その者たちの心中をハッキリと分かりましたので、弥勒菩薩は自らの疑問を解決するだけでなく、この者たちの疑問を解かなければならないと思い、文殊菩薩に向かって尋ねたのでした。

【奇瑞(きずい)(瑞相(ずいそう))が現われた理由を、弥勒菩薩が文殊菩薩に尋ねる】——

【四一頁 七行】 [(偈) 四一頁 終二行] 文殊菩薩に尋ねます。

『何(なん)の因縁を以て此(こ)の瑞神通(ずいじんづう)の相あり』 / 『文殊師利(もんじゅしり)導師何(なん)が故(ゆえ)ぞ眉間白毫(みけんびやくごう)の大光(だいこう)普(あまね)く照らしたもう』

「文殊菩薩よ。世尊の眉間から光を放たれて、不可思議な世界が現出するのは一体なぜですか？ 曼荼羅華(まんだらけ)が天から降り注ぎ。 / 『栴檀(せんたん)の香風 衆の心を悦可(えっか)す』 栴檀(せんたん)の香風がそよいで、人々の心は喜びに満たされています。そればかりか、はるか『東方の世界』も照らし出されて、すべてを目(ま)の当たりにすることができます。こうした現象が起きているのは、一体どのような意味があるのでしょうか」

【白毫相(びやくごうそう)(眉間からの光)で照らし出された東方萬八千世界(未来)の様子】——

【(偈) 四二頁 三行】 『諸(もろもろ)の世界の中の 六道の衆生 生死の所趣(しよしゆ) 善悪の業縁(ごうえん) 受報(じゅほう)の好醜(こうしゆ) 此(ここ)に於て 悉(ことごと)く見る』 「私たちは、人間の住むあらゆる世界で六道を輪廻する人が、生まれ変わりして善悪の行為を重ね、そして、その報いを受ける姿を目の当たりにすることができました」

【(偈) 四二頁 五行】 『又諸佛 聖主師子(しやうしゆしし) 經典の 微妙(みみょう) 第一なるを演説したもう～ 衆生を開悟せしめたもうを親(み)る』 「また、多くの諸仏が最高の教えを人々に説かれ、数多くの人々が悟りを開くために導く姿も見えました」

【(偈) 四三頁 七行】 『復(また)菩薩の 身肉手足(しんにくしゆそく) 及び妻子を施して 無上道を求むるを見る』 「そして菩薩たちが、多くの人々を救うために、財宝のみならず自分の身や妻子までも捧げて、無上道を求める姿も見えました」

【(偈) 四四頁 一行】『又菩薩の禪に安じて合掌し～魔の兵衆を破して法鼓(ほうこ)を撃(う)つを見る』「また、菩薩が禅定の境地に至り、無数の偈をもって仏さまを讃嘆している姿や、巧みに譬えを用いて法を説き、仏道を妨(さまた)げる障害を、すべて打ち払って正法を世に広める姿も見ることができます」

【(偈) 四四頁 七行】『又菩薩の林に處(しよ)して光を放ち地獄の苦を濟(すく)い佛道に入らしむるを見る』「また、ある菩薩が林の中に隠れていても、その身からは光が放たれ、その光に慕い寄って来る人々を地獄の苦しみから救い、仏道に導く姿が見えました」

【(偈) 四四頁 八行】『又佛子の未(いま)だ嘗(かつ)て睡眠せず林中に經行(きょうぎょう)し佛道を勤求(ごんぐ)するを見る』「また、ある菩薩が夜、眠ることもなく精進し、悟りを求める続ける姿を見ることもできました」

【(偈) 四五頁 六行】『或(あるい)は菩薩の寂滅(じゃくめつ)の法を説いて種種(しゅじゅ)に無數(むしゅ)の衆生を教詔(きょうしやう)する有り或いは菩薩の諸法の性(しやう)は二相有ること無し猶(な)を虚空の如しと觀ずるを見る』「ある菩薩は、実相を悟ることによって煩惱から解脱する教えを、無数の人々に説いています。またある菩薩は、物事の相(すがた)は、相対する違いなどなく、二項対立・二元論の存在ではないただ一つのものであるということを観じています。それは、大空のどこをとっても同じように、何ひとつ違いはない同一のものだという意味を、菩薩たちが観じていることも見えました」

【(偈) 四六頁 二行】「以上のような数々の不可思議な情景を、世尊の眉間から放たれた光によって目(ま)の当たりにしているのです」

【**奇瑞(きずい)が現われたこと**の理由を、再び**文殊菩薩**に尋ねる】——

【(偈) 四六頁 六行】『佛子文殊願わくは衆の疑(うたがい)を決したまえ～世尊何(なん)が故(ゆえ)ぞ斯(こ)の光明を放ちたまう』「法の子である**文殊菩薩**よ。この一同の疑問を解いてください。世尊はなぜ光明を放ち、不可思議な情景を現わされたのでしょうか」

【(偈) 四六頁 終四行】『佛道場に坐して得たまえる所の妙法爲(さだ)めて此れを説かんとや欲す爲(さだ)めて當(まさ)に授記したもうべしや』「もしかすると、かつて世尊がブッダガヤーの菩提樹下でお悟られた最高の教えを、今、説かれようとされているのではないのでしょうか？あるいは、仏になれることの保証を、私たちに下さるためだとも推察しますが、如何でしょう。文殊菩薩よ。どうかお教えてください」

【**弥勒菩薩**の質問に対して、**文殊菩薩**が答える】——

【四七頁 二行】すると**文殊菩薩**は、**弥勒菩薩**をはじめとする多くの菩薩たちに答えました。

『我(わ)が惟付(ゆいじゆん)するが如き、今佛世尊、大法を説き、大法の雨を雨(ふ)らし、～大法の義を演(の)べんと欲するならん』「皆さん。私の推察に間違いがなければ、世尊は、これから最もすぐれた教えを衆生に説こうとなされているに違いありません」

【四七頁 五行】『我過去の諸佛に於て、曾(かつ)て此(こ)の瑞(ずい)を見たてまつりしに』「私が過去世において多くの仏にお仕えしていた時、今と同じ不可思議な現象を見たことがあります。そしてその時、仏は最もすぐれた教えをお説き下さいました。その経験

から言いますと、現在の不可思議な現象は、尊く深遠な教えを説かれるための手段として、現わされたものに違いありません。そのことを意味する過去世のお話について、これからお話したいと思います」

【過去世の話／日月燈明如来の世の話】——

【四七頁 八行】【(偈) 五二頁 一行】「はるか遠い過去、日月燈明(にちがつとうみょう)如来という仏がおられました。その時の話です。その仏は世の人々のために正しい教えを説かれました。ご生涯の初期、中期、後期のいずれにおいて、教えの説き方に違いはあっても、教えは深遠で清浄、完全なる教えでした。しかも如来は八正道を説き、声聞の境地を目指す者に対しては、それにふさわしい四諦の法門を説かれました。また縁覚の境地を求める者には十二因縁の法門を、菩薩のためには六波羅蜜の法門を説き、人々を無上の悟りへと導かれたのでした」

【四八頁 三行】【(偈) 五二頁 三行】「そして、その日月燈明如来が涅槃を迎えてお隠れになったのですが、その後、また仏が現われました。その仏も同じ『日月燈明如来』と申されました。そしてその仏の次にも同じ名前の如来が現われ、そのことが二万仏にわたって続きました。この二万の仏はすべて、同じ『日月燈明如来』というお名前で、姓も同じ『頗羅墮(はらだ)』と申しました。その二万仏目の日月燈明如来ですが、出家をする前に八人の王子をもうけていました。この八王子は、王である父が出家して、最高の悟りを得たことを聞くと、次々に父を慕って出家しました。そして八王子はみな、法師となって数多くの仏のもとで徳行を積んだのでした。その時、日月燈明如来は、大乘の教え『無量義・教菩薩法・仏所護念』の教えを説かれたのですが、『無量義』の教えを説き終えると、『三昧』に入られたのです。すると今の釈尊と同じように、天空から花びらが舞い降り、大地は感動で打ち震え、仏の眉間から光が放たれて、東方の世界をくまなく照らし出しました。その様子は、今とまったく違いはありません」

【過去世、日月燈明如来が『法華経』を説く】——

【四九頁 終三行】【(偈) 五三頁 終行】「弥勒菩薩よ。よく聞いてください。じつはその時の法会に800人の弟子を持つ『妙光(みょうこう)』という名の菩薩がいました。そして三昧を終えた日月燈明如来は、妙光菩薩の徳分を讃えられました。そして【(偈) 五三頁 終行】『汝は爲(に)れ世間の眼(まなこ)』 『あなたは世間の『無数の人たちの眼』となる人です。【(偈) 五四頁 七行】 / 『諸佛には甚(はなはだ) 値(あ) いたてまつり難(がた) し、億劫(おっこう) に時に一(ひと) び遇(あ) いたてまつる』 よいですか。仏とは何億年に一度しか出会えない貴重なことです。ですからしっかりと仏の教えを聞くのです』といわれたのでした」

【五〇頁 二行】【(偈) 五四頁 二行】『妙光菩薩に因(よ) せて大乘經の妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念と名(なづ) くるを説きたもう』 「そしてついに、日月燈明如来は妙光菩薩に語りかける形をとって、大乘の教えである『妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念』という大変尊い教えを説かれたのでした。この尊い教えを聞いて、妙光菩薩をはじめ多くの者たちは、深い感動を覚えたのでした。日月燈明如来の説法は、計り知れないほど長い時間を要したの

ですが、／（『佛の所説を聴(き)くこと、食頃(じききょう)の如しと謂(おも)えり』) その説法はまるで一度の食事の時間くらいに短く感じられ、誰ひとり、怠ける気持ちを起す者はいませんでした。そして『妙法蓮華經』を説き終えた日月燈明如来は、その座にいた修行者、異教の神々、鬼神たちなどに向かって、／（『如来、今日(こんにち)の中夜(ちゅうや)に於て、當(まさ)に無餘涅槃(むよねはん)に入(い)るべし』) 『私は本日の夜半、入滅するであろう』と宣告されたのでした」

【五〇頁 終四行】「その座のなかに徳蔵(とくぞう)という菩薩がいましたが、如来はその徳蔵菩薩にむかって、『そなたは次の世で、淨身(じょうしん)如来という名の仏に成るであろう』と授記(じゆき)をされました。そしてそのお言葉のとおり日月燈明如来は【(偈) 五五頁 一行】（『佛此(こ)の夜(よ)滅度したもうこと薪(たきぎ)盡(つ)きて火の滅(き)ゆるが如し』) その夜、まるで薪(たきぎ)が燃え尽きるように、静かに滅度されたのでした」

【文殊菩薩と弥勒菩薩の前世】——

【五〇頁 終行】「如来の滅後、妙光菩薩が妙法蓮華の教えを護持し、はかり知れないほど長い間をかけて、妙法蓮華の教えを説き続けました。そして日月燈明如来の八人の王子たちは、妙光菩薩を『師・先生』と慕って精進し、ついにはその八王子たちも最上の悟りを得ることができたのでした」

【五一頁 三行】「八王子の中で最後に仏に成った王子を『然燈(ねんとう)』と言います。また妙光菩薩の800人の弟子の中に、『求名(ぐみょう)』と言う人がいました。【(偈) 五一頁 四行】（『利養(りよう)に貪著(とんじゃく)せり。復(また)衆經(しゅきょう)を誦誦すと雖(いえど)も而(しか)も通利(つうり)せず、忘失(もうしつ)する所多し』) 【(偈) 五五頁 終五行】（『心常に懈怠(けたい)を懐(いだ)いて名利(みょうり)に貪著(とんじゃく)せり 名利を求むるに厭(いと)くこと無くして～廢忘(はいぼう)して通利(つうり)せず』) その者は、利己的で自己中心。執着心も強く、いつも遊び惚(ほう)けて、教えを学んでもその真意を理解することができませんでした。そればかりか、聞いた教えはすぐ忘れてしまうありさまで、とにかく自分の名声を欲する人でした。そのために、『求名(ぐみょう)』と名づけられたのでした。

【五一頁 六行】（『諸(もろもろ)の善根を植えたる因縁を以ての故に 無量百千萬億の諸佛に値(あ)いたてまつることを得て』) 【(偈) 五五頁 終二行】（『亦(また)衆(もろもろ)の善業を行じ 無數(むしゅう)の佛を見たとまつることを得 諸佛を供養し 隨順(ずいじゆん)して大道を行じ』) しかしこの『求名』も『善い行い』を実践し、そのおかげで数多くの仏にお会いすることができたのでした。その結果、『求名』は①仏を敬い供養することができ、そして、②仏の教えを実践できるようになったのでした

【五一頁 七行】（『彌勒(みろく)、當(まさ)に知るべし、爾(そ)の時の妙光菩薩は豈(あ)に異人(ことひと)ならん乎(や)、我が身是(こ)れなり。求名(ぐみょう)菩薩は汝が身是(こ)れなり』) 【(偈) 五六頁 三行】（『懈怠(けたい)なりし者は汝是(こ)れなり 妙光法師は今則(いますなわ)ち我が身是(こ)れなり』) 「よいですか弥勒菩薩よ。じつはこの『妙光菩薩』とは、私(文殊菩薩)の前身であり、ほかでもありません。『求名菩薩』は、あなた(弥勒菩薩)の前身なのです」

【今の奇瑞きざいは過去世の奇瑞と同じ。それは『法華經』が説かれる前兆】——

【五一頁 終四行】 『今此(こ)の瑞(ずい)を見るに本(もと)と異(ことな)ることなし。是(こ)の故に惟付(ゆいじゅん)するに、今日(こんにち)の如來も當(まさ)に大乘經の妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念と名(なづ)くるを説きたもうべし』 【(偈) 五六頁 四行】 『本(もと)の光瑞(こうずい)此(かく)の如し 是(こ)れを以て知んぬ 今の佛も 法華經を説かんと欲するならん 今の相本(そうもと)の瑞(ずい)の如し』 「今、世尊が白毫相(びやくごうそう)の光を放ち、奇瑞を現わされていますが、これは昔の日月燈明如來の時の奇瑞と少しも違いはありません。このことから推察すると、世尊はこれから『妙法蓮華經』という最上の教えを説かれるに違いがありません」

【(偈) 五六頁 終四行】 『諸人(しよにん)今當(まさ)に知るべし 合掌して一心に待ちたてまつれ 佛當(まさ)に法雨(ほうう)を雨(ふ)らして 道(どう)を求むる者に充足(じゆうじゆ)したもうべし』 「皆さん。いまこそその時です。世尊は尊い教えを雨のように降らし、仏の道を求める者や、声聞・縁覺・菩薩の道を歩む者のなかで不安や疑問を持つ者がいても、その不安と疑問をすべて解決して、余すところ無く、み教えをお説き下さいます。ですから皆さん。合掌して、一心に待たせて頂きましょう」

この文殊菩薩の『重大発言』を聞いた皆は、仏さまを合掌して仰ぎ見て、法華經を説かれるその瞬間を、固唾(かたず)をのんで一心に心待ちにしたのでした。



きょうだい 經題の意味

(P13・6行/P9・5行)

原名はサンスクリット(梵語・ぼんご)「サツダルマ・プンダーリーカ・ストラ」です。「サツダルマ」は「サットとダルマ」の合成語で、サットは〈真実の・正しい・善い・勝れた〉という意味。ダルマは〈法〉という意味。～ところが鳩摩羅什(くまらじゆう)はこれを〈妙法〉と訳しています。私(開祖さま)は、これが最高の名訳だと思います。～「プンダーリーカ」は「蓮の花」。〈人間は俗世(泥)のなかで生活しながら、それに染まることなく美しい・自由自在な生活ができる〉という教え。

※(P17・6行/P12・1行) 梵文学の本田義英京都大学教授は——「プンダーリーカ」は、人間のなかの白蓮華である「菩薩」を意味すると論じています。——〈不執不着(ふしゅうふじゃく)なる般若空觀的菩薩行の實踐者を意味する〉というのです。かみ砕いて言えば、(菩薩とは…) 〈a)目の前の現象にとらわれず、b)小さな我に執着せず、c)ものごとの実相を正しくみることによって、d)全ての人間は本質において平等であることを達觀し、e)そういう觀(み)かたにもとづいて人を救い世を救う行ないに挺身する人〉。それがプンダーリーカすなわち白蓮華の意味だというのです。

「ストラ」は「通し糸」の意味で、〈尊い仏の教えを一筋の系統にまとめたもの〉。「經」です。「經」も元は「縦糸・たていと」の意味です。(P18・5行/P12・終6行)

※(P18・終3行/P12・終2行)「サツダルマ・プンダーリーカ・ストラ」すなわち《妙法蓮華經》というのは、「①俗世のなかにながら、現象の移り変わりに迷わされず、②仏の大慈悲のまにまに正しく生き、③自分の人格を完成しつつ、世の中を完全平和な理想境につくり上げてゆく道を教え、しかも、④人間は誰でもそれができる本質を平等に持っているのだ」ということを説いた、この上もなく尊い教えだと定義できます。

⇒ 【法華經は菩薩行実践の教え】 (P18・2行/P12・7行)

《^{しゆい}慧惟のひととき ①》

庭野開祖は、『法華經』を「①俗世のなかにながら、現象の移り変わりに迷わされず、②仏の大慈悲のまにまに正しく生き、③自分の人格を完成しつつ、世の中を完全平和な理想境につくり上げてゆく道、④人間は誰でもそれができる本質を平等に持っている⇒
ということ説いた尊い教え」とであると説かれています。

また、『菩薩』(白蓮華)とは—— ①目の前の現象にとらわれず、②小さな我に執着せず、③ものごとの実相を正しくみることによって、④全ての人間は本質において平等であることを達観し、⑤そういう観(み)かたにもとづいて人を救い世を救う行ないに挺身する人 だと示されています。

—— この『法華經』の意味①～④と、『菩薩』(白蓮華)の定義①～⑤を、噛み締めてみましょう。

『^{かく}是の^{ごと}如きを^{われき}我聞きき』 (三七頁 一行)

『如是我聞』。大乘經典のほとんどで最初に記される言葉。「結集」の証。

漏

(P32・1行/P23・1行)

『諸漏(しよろ)已(すで)に盡(つく)して』…「漏」というのは、煩惱が六根から漏れ出しているという意味で、～これらの本能、欲望は、決して悪いものではありません。お釈迦さまも本能は無記(むき)であるとっておられます。「無記」とは、善いとも悪いとも言えない善悪以前のものであるという意味です。ところが、その本能や欲望に〈我・執着〉の要素が加わってくると、そこに煩惱が生れ、その煩惱が人間を迷わせたり、苦しめたり、ひいては世の平和をかき乱す大本になるのです。仏の教えの初歩として、まず煩惱を除くことを強調されるわけは、そういうところにあるのです。

とん よく 貪 欲

(P33・終5行/P24・2行)

貪り欲する心です。あれも欲しいこれも欲しい、これでは足りないもっと欲しいと、むやみやたらと欲しがらる心です。物質だけではありません。不相应な名誉を欲しがったり不合理に奉仕や服従を要求したりするのも、やはりそれにはいります。～
煩悩が心の中にごめいているうちは、まだ個人の不幸にとどまるわけですが、その不満や怒りが相手に対し、世の中に対して爆発するようになると、問題は大きくなります。ですから数々の煩悩のうちでも、まず慎むべきは〈貪欲〉なのであります。

じ り り た じ かく かく た 自 利・利 他 自 覚・覚 他

(P35・2行/P25・1行)

この〈自利〉から〈利他〉へ進み、〈自覚〉から〈覚他〉へと志してゆくならば、それがすなわち菩薩の行であります。といっても、けっして個人の覚(さと)りを完成してから、はじめて他を救い、他を覚らせる行ないにはいるのではなく、自らを引き上げる修行をしながら、他をも引き上げる行いに挺身する… また、他を引き上げる力をつけるために自らを引き上げる… これではなくてはなりません。すなわち 〈自利・利他〉〈自覚・覚他〉です。これが大乘仏教徒の正しいありかたであります。

《息惟のひととき ②》

「自らを引き上げる修行をしながら、他をも引き上げる行いに挺身する… また、他を引き上げる力をつけるために自らを引き上げる」という。〈自利・利他〉〈自覚・覚他〉こそが大乘仏教徒として、立正佼成会 会員としての「大切な信仰姿勢」である。

と庭野開祖は説いています。――

では、私の信仰姿勢は如何でしょうか？ 特に冒頭部分の「自らを引き上げる。高める」ということを中心して精進しているか？ 振り返ってみましょう。

じ ゆう じ ざい 自 由 自 在

(P36・2行/P25・終4行～)

『有結を盡くして』ものごとにとらわれ執着する心をすっかり除き尽くしているのです。つまり、すべてのものごとの実相を正しく見えていますから、目の前の変化に心を煩わされることがないのです。つねに自由自在な心境であることができるわけです(『心自在を得たり』)。～ 人間の歴史は、原始時代からこのかた、飢えからの自由を、自然の脅威からの自由を、貧困や不幸、圧制からの自由をと、つねに「自由と解放」を望み進んできました。まことに人間の歴史は、「自由と解放」への歴史であると言わなければなりません。

ところが、いくら自由と解放を追い求めてみたところで、心が「移ろいゆく現象」にとらわれている限りは、とうてい「究極の自由」は得られないのです。「絶対の自由」は得られないのです。～ 〈有・う〉すなわち、変化する現象に心が引っかかっているかぎり、不自由はどこまでもついてまわります。

釈尊のお弟子のある比丘が、性の悩みを断ち切るために、肉体の一部を切り捨ててしまいました。それをお聞きになった釈尊は、「切るべきものは他にあったのに、あの人は切るべきものを間違えた…」と。～ 切るべきものは、**肉体(現象)ではなく、肉体(現象)**にひっかかっている「心」でなければならなかったのです。～

心が現象へのとらわれから解き放たれておれば、悩みもなければ、苦しみもない、自由自在な心境にいられるのです。ですから、『人間の幸、不幸を計る尺度』というものは、現象への『とらわれから、どれくらい離れることができるか』というその度合いである」と定義できましょう。

参考:『四苦八苦』⇒「生・老・病・死」、「怨憎会苦・おんそうえく」、「愛別離苦・あいべつりく」、「求不得苦・ぐふとつく」、「五蘊盛苦・ごうんじょうく」

《^{しゆい}思惟のひととき ③》

『人間の幸、不幸を計る尺度』とは、『とらわれから、どれくらい離れることができるか』と定義できます。と庭野開祖は示しています。

『とらわれ』というのは、『決めつける心』でもあり、決めつけて、そこから『抜け出せない状況』でもあります。この『人間の幸不幸を計る尺度』というこの定義。自分に当てはめて考えてみましょう。

ぜんこう とく もと 善行が徳の本

(P47・終3行/P34・7行～)

「徳本」というのは、「善根」と同じ意味です。仏果(仏の悟り)の大本となるものという意味です。その大本になるものと言うのは何かといえば、「善い行いをすること」にほかなりません。～ 善い行いをすることは善い心を育てるものであり、それがとりもなおさず「仏の悟り(仏果)」を得る根本であるということです。ですからどのような教えでもよい、だれの教えでもよい、『善いことはどしどし実行してゆくこと』、これが《人格完成の根本の道》であると知らなければなりません。

『諸佛の所に於て衆の徳本を植え、～ 慈を以て身を修め』 (三八頁 一行)

みろくほさつ 弥勒菩薩

(P54・1行/P39・1行)

ところが、このなかにただ一人、実在したことが確実な記録に残っている人物がいます。それが弥勒菩薩です。～ 無量無数の仏がおられるなかで、「応身(おうじん)の仏」として娑婆世界に出てこられたのは釈迦牟尼如来が最初であります。その釈迦牟尼如来が、未来世に出現されるであろう仏として、この世に実在した人物・弥勒比丘を指定されたことには、じつに重大な意味が含まれていると思います。すなわち、《この娑婆世界を救うのは、娑婆世界に生まれた人間でなければならない》ということです。

※ (P57・2行/P41・4行) 目に見えぬ神、別世界、天上界にすんでいる神… そういった存在が我々を導き、救うのではない。あくまでも人間としてこの世に生まれ、人間としての苦悩・哀歎(あいかん)を経験し、様々の修行を積んだうえで悟りをひらいた人、その人の教えが私たちを導き、救うものである。これと同じ思想に基づくものが、⇒『地涌の菩薩』

『止みね、善男子、汝等が此の經を護持せんことを須いじ。所以は何ん、我が娑婆世界に自ら六萬恒河沙等の菩薩摩訶薩あり』 (二五八頁 五行 『從地涌出品』)

『亦人・天に依止して住せず』 (二六六頁 終二行 『從地涌出品』)

《思惟のひととき ④》

「仏果(仏の悟り)の大本となるものは何かといえば、善い行いをするにほかなりません。善いことはどしどし実行してゆくこと、これが人格完成の根本の道である」と庭野開祖は説いています。 — さて私は日頃、「善い行いをしよう」と心がけている自分であるか？ また、果たしてどれほどの「善い行い」を、日々、実践している自分であるか？ 振り返ってみましょう。

※ 『薄徳の人は善根を種えず』 (二七六頁 一行 『如来寿量品』)

宗教協力と仏教

(P62・終1行/P45・終2行～)

お釈迦さまは、古来のバラモン教の信仰を頭から排斥(はいせき)しようとはなさいませんでした。そういった神々をも仏法の中に包容し、仏法によってそれらに新しい意味を与えられたのです。

無量義

(P73・1行/P52・終3行)

まとめて簡単に言えば、**①この世に現われているあらゆる現象は、千差万別であるが、それらはみな、縁起によって存在しており、②その本質においてはみな平等であり、大調和している**のであるという真理をみとどけ、しっかりと悟り、自分のものにしなさい。と同時に、**③すべての教えも、その現われはいろいろさまざまであるけれども、もとをただせばただ一つの真理(仏の大慈悲)から生まれたものであることを認識し、理解しなさい**という教えです。

一切の雑念を断ち切り、ある〈善き思い〉〈正しい教え〉に全精神を集中し、その一念が長い間、切れ目なく続いている状態、これが三味なのです。～

最初から、こうした雑念を起こすなどといっても、それは無理です。必ず起こります。ですから初心のうちは、おこった雑念をすぐ消し去ってしまう工夫が大切なのです。その方法として、昔の高僧たちは、〈二念をつぐな〉ということと〈雑念を相手にするな〉と言うことを教えています。～ では実際問題として、どうしたら雑念を相手にせず、二念をつがずにすまされるかといいますと、とっさに唱題または読経の声を強めるなり、それまで口の中に唱えていたのなら声に出してみるなりして、心を唱題、読経そのものへ返してしまえばいいのです。～ とにかく「正念の方へ帰る心のはたらき」だけをすればいいのです。そうすれば～ 雑念のほうは、たちまち立ち消えになってしまうのです。

※(P85・終行/P61・終3行) いちばん大切な「三味行」とは、物事のありのままの相(すがた)を見極めるように努力することです。ものごとの差別相と平等相をありのままに、自分の好悪による判断を入れずに見続けるのです。

⇒ そうすれば、仏と同じ智慧が自然と身についてくるようになるのです。

※参考: 《五観》 —

『真観・清浄観・廣大智慧観・悲観及び慈観あり』 (三六六頁 一行 『観世音菩薩普門品』)

《口安楽行》 —

『他人の好悪長短を説かざれ』 (二四六頁 七行 『安楽行品』)

《息惛のひととき ⑤》

- ①瞬時に感じた「一念」(湧き起こった感情)を、どうしても引きずってしまいがちな自分がいます(二念、三念・・・へと引きずってしまう自分がいます)。この〈二念をつぐな〉という教えを、あなたはどう受け止めますか。
- ②「自分の好悪による判断を入れずに見続けよ」という庭野開祖の教え。あなたは如何でしょうか。以上2点、少し考えてみましょう。

此土の六瑞

(P89・3行/P64・8行～)

ここで見過ごしてならないのは、天の花々が仏さまのみ上ばかりでなく説法会に集まった全ての人々の上にも降りかかったということです。「真理を説く」ことは勿論ですが「真理を聞く」というのも同じように尊く、賛嘆され供養されるべきことなのです。ですから、仏法を聞き、仏法を学ぶ者は、たとえ耳に聞こえず、目には見えなくても、常に天地に賛嘆されているのだという自覚を持たなければなりません。自信を持たなければなりません。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑥》

「真理を説く」ことは勿論ですが『真理を聞く』というのと同じように尊く、賛嘆され供養されるべきことと、庭野開祖は解説しています。

— このことを、あなたはどのように感じになりますか？

他^た土^どの六^{ろく}瑞^{ずい}

(P105・終4行/P76・4行～)

「此土の六瑞」とともに、これから説きだされようとする法華経が、この世のありとあらゆる生あるものにとってどんなに大切な教えであるか、とくに人間社会にとってどんなに重大な意味をもつ教えであるかを象徴しているということが出来ます。

慈^じと智^ちの共同作業

(P109・終4行/P79・終3行)

(弥勒菩薩が文殊菩薩に質問するのは) 弥勒菩薩が、自分の疑問を解決するためばかりでなく、①多くの人々の心中をも察して質問したこと、②そして質問の相手が文殊菩薩であったということ、この二つには大きな意味が含まれています。

第一に、一切の人間に代わって質問するということは、つまりその人たちに法の布施をしたいという慈悲の現われです。～

第二に、(弥勒菩薩は『慈悲の菩薩』、文殊菩薩は『智慧の菩薩』といわれている) 〈慈悲〉が〈智慧〉に呼びかけたということになります。〈慈悲〉の呼びかけに応じて、〈智慧〉が発動するのです。これは、菩薩道を行ずる者にとって、大変大切な手本であると言わなければなりません。

回^え向^{こう}

(P136・2行/P100・2行～)

この〈ふり向ける〉ことを、〈回向〉といいます。〈回〉はまわす。〈向〉は向ける。そこで回向というのは、自分の持っているものや自分が受けるべきものを、他へふり向けることを意味するのです。

※『回向』とは： 言い換えると「人に花を持たせる」ことだとも言える。

五^ご神^{じん}通^{つう}

(P142・終5行/P104・終5行～)

強い三昧力に達した人のみが見られる、特別な能力のことです。

〈天眼通・てんげんつう〉… 普通の人に見えないものを見通す能力。凡人の眼というものは貪・瞋・痴(とん・じん・ち/貪り・怒り・本能のみに動かされる)という三毒にくらまされて、ものごとの真相を見極めることのできない場合が多いものです。ところが、そういう煩惱を除き尽くし、心の眼が開けてくれば、どんな複雑なこんがらがった

ものごとでも、その底にある真相をピタリとしかも整然と見極めることができます。

※ 物事を自分中心にとらえず、「客観的」に洞察できること。

＜天耳通・てんにつう＞… 普通の人には聞こえない音や声を聞くことのできる能力。自己中心の生き方や考え方ばかりしていると、その＜我執＞が耳をも狂わせてしまいます。

※ 相手の言葉に引きずられず、自我にとらわれないで「客観的」に聞く。

宮澤賢治『雨ニモマケズ』「アヲカトヲ ジブソカザ ヲウ入ルニ ヲミキリテカリ」

凡夫は、『耳根は亂聲を聞いて 和合の義を壞亂す』。(四一六頁 終行 『仏説観普賢菩薩行法經』)

＜他心通・たしんつう＞… ひとの心をすっかり見通す能力。

※ 相手の立場になり切れば、自然と解ってくる。

＜宿命通・しゆくみょうつう＞… 前の世のことまで知ることのできる能力。これを現世に限っていうと、＜人が過去にたどって来た道を洞察できる眼力＞。

※ その人が、そこに至るまでの経緯(例・成育歴や置かれた環境)に思いを寄せて考えること

＜神足通・じんそくつう＞… すばらしい速さで、どんな所へでもいける能力。心を自分の身の狭い範囲にとどめてばかりいないで、常に広く社会全体のこと、人類全体のことに思いを馳(は)せることができなくては、立派な現代人とは言えません。

※ 相手の事を思うと、居ても立っても居られず、すぐ飛んで行くこと。

この五神通のほかに

＜漏尽通・るじんつう＞… 自由自在に人の心の迷いを除いてあげられる能力があり、これを合わせて「六神通・ろくじんづう/六通・ろくつう」といいます。

《息惟のひととき ⑦》

この「五神通」。そして、＜漏尽通＞を加えた「六神通」。
— これらのことを、自分に当てはめて考えましょう。

じゃく めつ
寂 滅

(P165・4行/P121・7行～)

くわしく説明すれば一冊の本になるほどですが、ひとことでは、すべてのものは千差万別であるように見えるが、その本質においては差別がなく、平等であり、大調和しているということに悟ることによって得られる安心の境地です。

目の前の現象に心を引っかからせている限り、煩惱はけっして消滅するものではなく、現象の変化にとらわれなくなった時、初めて真の安心の境地が得られるのです。

『寂滅の法を説いて 種種に 無数の衆生を 教 詔する有り』 (四五頁 六行)

じゅうごう
仏の十号

(P179・3行/P133・7行)

すべて、仏さまの尊称。十の尊称。

- <如来・にょらい>… 真如から来た人。真如の体現者。
- <応供・おうぐ>… 供養を受けるにふさわしい人。尊敬を受けるに値いする人。
- <正徧知・しょうへんち>… この世のあらゆる物事に徧（あまね）く行きわたる正しい智慧を具えた人。
- <明行足・みょうぎょうそく>… 「明」智慧、「行」実践、の二つが満ち足りている人。
- <善逝・ぜんぜい>… 善（よ）く逝（さ）った、迷いを完全に除き去った人。
- <世間解・せけんげ>… 人がそれぞれ違った境遇を背負っているのを見分ける力。世間のことをよく知る人。因果の理を解了する人。
- <無上士・むじょうじ>… この上ない立派な人。無上の人格を成就した人。
- <調御丈夫・じょうごじょうぶ>… 素晴らしい調教師のように、どんな人をも思うままに導くことのできる人。
- <天人師・てんにんし>… 「天」天上界、「人」人間界の大導師。
- <仏・ぶつ>… ブツダ。悟った人。
- <世尊・せそん>… 「世」世の中で、「尊」最も尊重される人。
- ※ <仏> <世尊> を合わせて <仏世尊> とする説。または <仏> までを仏の十号として <世尊> は別の尊号とする諸説あり。

四 諦

(P183・4行/P136・6行～)

お釈迦さまが、ブッタガヤーで無上の悟りに達せられてから、まず鹿野苑（ろくやおん）におもむかれ、五人の比丘たちに対して最初の法輪を転ぜられた時の教え。

具体的には、次のように釈尊はお説きになられています。

苦 諦 (くたい)

(P187・終4行/P139・6行～)

「すべては苦であると見よ」とは、苦を直視せよという教えにほかなりません。苦というものを心の表面でいい加減にごまかさず、ハッキリと見つめよ（苦から逃げないで堂々と正面から受け止めるのだ）というのです。

※ 『四苦八苦』 — 「生・老・病・死」、「怨憎会苦・おんそうえく」、「愛別離苦・あいべつりく」、「求不得苦・ぐふとつく」、「**五蘊盛苦・ごうんじょうく**」

集 諦 (しつたい)

(P189・6行/P140・9行～)

苦の集(原因)、それは「常に満足を求めてやまぬ渴愛(かつあい)である」～ 「苦から逃げ隠れしないで、その実体を直視し、そしてその原因を探求し、反省してみるがよい、すると必ずそれが『貪欲』に基づくものであることに気がつくであろう」。

滅 諦 (めつたい)

(P191・3行/P141・終5行～)

「渴愛をあますところなく捨て去り、それから解脱し、執着を断ち切ったとき、苦は消滅するのである」。

道 諦 (どうたい)

(P191・7行/P141・終1行～)

「苦を滅する道。それは正しい八つの道。すなわち八正道がそれである。」

はっしょうどう 八正道

(P192・7行/P142・終7行) (P209・6行/P154・3行)

- <正見・しょうけん>… 自己中心の見方をせず、一方に片寄らず、正しく見る。
<正思・しょうし>… ものの考え方を自己本位に片寄らせず、大きな立場、真理に即する。
<正語・しょうご>… 正しい言葉づかいをする。言論が真理に合っている。
『口の四悪』をしない。「妄語・両舌・悪口・綺語(口から出まかせ)」
<正行・しょうぎょう>… 仏の戒めになかった正しい行ない。
『身の三悪』をしない。「殺生・偷盗(ちゅうとう)・邪淫(じゃいん)」。
<正命・しょうみょう>… 生活財を正しく求める。人の迷惑になる仕事・行動をしない。
<正精進・しょうじょうじん>… 正しい目的に対して、励み進む。怠ったり脇道に反れない。
<正念・しょうねん>… わがままな分別を捨て、心を正しい方向へ向ける。
<正定・しょうじょう>… 心をいつも正しくおいて、周囲の変化によってぐらつかない。

※『八正道』と庭野会長が説く『三つの実践』

「おはようございます」「ハイと返事」「履物、椅子を揃える」

しょう 正とは

(P192・終4行/P142・終4行～)

「正しい」というのは、<真理に合った>ものであり、<調和のとれた>ものであり、<目的に合った>ものであるという意味です。～ したがって「正しい生き方」というのは、<真理に合った>生き方であり、世の中全体とよく<調和のとれた>生き方であり、人類全体の進歩という大きな<目的に合った>生き方です。

<真理に合った>— ①自分本位にものをみない。②一方に偏った見方をしない。

<調和のとれた>— ≪琴線(きんせん)のたとえ≫

絃(げん) 急ならば音(こえ) 絶(た) え

絃(げん) 緩(かん) ならば鳴らず

緩急(かんきゅう) 宜(よろ) しきを得て

楽譜(がくふ) 皆(みな) 諧(ととの) う

『四十二章経』

<目的にあった>— 「人類全体の進歩」という大きな目的に合った。

が 我を捨てる功德

(P228・終2行/P170・4行～)

『諸(もろもろ)の善根(ぜんこん)を植(う)えたる因縁(いんえん)を以(もつ)ての故(ゆえ)に、無量百千萬億(むりょうひゃくせんまんにやく)の諸佛(しよぶつ)に値(あ)いたてまつ

ることを得て、供養(くぎょう)・恭敬(そんじゅう)・尊重(さんだん)・讚歎(さんたん)せり』 (五一頁 六行)

利益を得たいとか、名声を得たいとかいう利己的な欲望(利養)にばかり心がかまかけていますと、教えを聞いても、それを自分本位に解釈しますから、なかなかその真義に通利(つうり・意味は、とおること)することができません。しかも上(うわ)の空で聞

いていますから、よく忘れるのです。～ところがそのような人でも、日常生活に「善行」を積んでいるうちに、だんだん心が美しくなり、名利(みょうり)を求める気持ちが薄らいでゆきます。そうすると、いろいろな「いい教え」がそのままズンズン心に入ってきてます。それが無量百千萬億の諸仏に値(あ)いたてまつることにほかなりません。

そして、その教えに感謝し、実践し、心から尊び敬ってゆくうちに、その人の人間性はますます磨かれてゆくのです。そしてついには、求名(ぐみょう)とあだ名をつけられていた比丘が、弥勒菩薩(みろくぼさつ)とあがめられるようになるわけです。

《息のひととき ⑧》

娑婆世界に於いて、釈尊の次に仏となられるお方が『弥勒菩薩』です。

その『弥勒菩薩』が前世では、「自分中心・執着心が強い。教えを聞いても理解できず。しかもすぐ忘れる。自分の名声を求める」という『求名・ぐみょう』であり、その『求名』が『善い行いを実践したおかげで、数多くの仏に出会えた』というお話を聞いて・・・

—— あなたは、何を感じ取られますか？

世間の眼

(P243・終2行/P183・6行)

『汝は爲れ世間の眼 一切に帰信せられて 能く法藏を奉持す』(五三頁 終一行)

あなたは世間の無数の人たちの眼(まなこ)の代わりとなる人です。その智慧の眼によって、あらゆるものごとの実相を見通す人です。あなたは一切の人々に帰依せられ、信じられ、そして多くの仏の教えをしっかりと保持する人です。

悟りを開いていない人は、この世の真実が見えません。残念ながら、世間の多くの人は、こういう状態にあるのです。～ せめて世間の人々のかわりに、我々が真実をみるように務めなければならないのです。ほんとうの智慧でものごとの実相を見通し、それを人々に伝えて、見方・考え方の間違いを正し、世の中が誤った方へ歩むのを正しい方向へ直してあげなければなりません。

諸仏には会い難し

(P244・終5行/P184・1行)

『諸佛には甚だ値いたてまつり難し 億劫に時に一び遇いたてまつる』(五四頁 七行)

仏さまの世に出られた時代にちょうど生れ合わせ、そして仏さまの教えを直接うかがうということは、よほどの幸運に恵まれない限りではあることではないということです。

『無上甚深微妙の法は百千萬劫にも遭遇たてまつること難し 我今見聞し受持す

ることを得たり 願わくは如来の第一義を解せん』 (開經偈)

ほとけ 仏を見る

(P251・1行/P189・7行～)

『亦衆の善業を行じ 無数の佛を見たてまつることを得 諸佛を供養し 隨順

して大道を行じ 六波羅蜜を具して今釋師子を見たてまつる 其れ後に當に

作佛すべし』 (五五頁 終二行)

誰でも常に無数の仏にお会いしているはずなのですが、なかなかそれが見えません。心がそこまでできあがっていないために、目の前を素通りにしてしまうのです。それが見えるようになるということは、教えに対して本当に心が向いたということです。教えを受けたいという真心が強まったということです。このことが解れば、次の『諸仏を供養し』も、『隨順(ずいじゆん)して大道を行じ』も、その意味がわかってくるはずで

『①亦衆の善業を行じ ②無数の佛を見たてまつることを得 ③諸佛を供養し ④隨順して大道を行じ ⑤六波羅蜜を具して⑥今釋師子を見たてまつる ⑦其れ後に當に作佛すべし』

参考：「無数の仏にお会いする」 ⇨ 会う人、会う人が「仏」に見える。

『是の師に隨順して學せば 恒沙の佛を見たてまつることを得ん』 (二二頁 終行『法師品』)

※ 『見る』『視る』『観る』『診る』『診る』

《息惛のひととき ⑨》

「誰でも常に無数の仏にお会いしているはずなのですが、なかなかそれが見えません」というのは、なぜなのでしょう？ また、どのようにしたら「仏を見る」「仏にお会いできる」ことができるのでしょうか？

— あなたはどのように考えますか？ 考えてみましょう。

《息惛のふいかえり まとめ》

今日の『序品第一』を通して、何を学び取られましたか？
そして「何を実践・実行しよう」と思われましたか？
振り返ってみましょう。(何を一番印象深く感じ、受け止めることができましたか？
また、具体的に何を実践しようと思いましたか？)

合掌